毎日新聞 2018年11月16日 夕刊

シネマの週末
weekend cinema

週末興行成績

（10、11日）

❶	ボヘミアン・ラプソディ	1週目
❷	①ヴェノム	2週目
❸	ういらぶ。	1週目
❹	②スマホを落としただけなのに	2週目
❺	③映画HUGっと！プリキュアふたりはプリキュア オールスターズメモリーズ	3週目
❻	GODZILLA 星を喰う者	1週目
❼	続・終物語	1週目
❽	⑤旅猫リポート	3週目
❾	ANEMONE／交響詩篇エウレカセブン ハイエボリューション	1週目
❿	ジョニー・イングリッシュ アナログの逆襲	1週目

（右の数字は前週順位。興行通信社調べ）

チャートの裏側

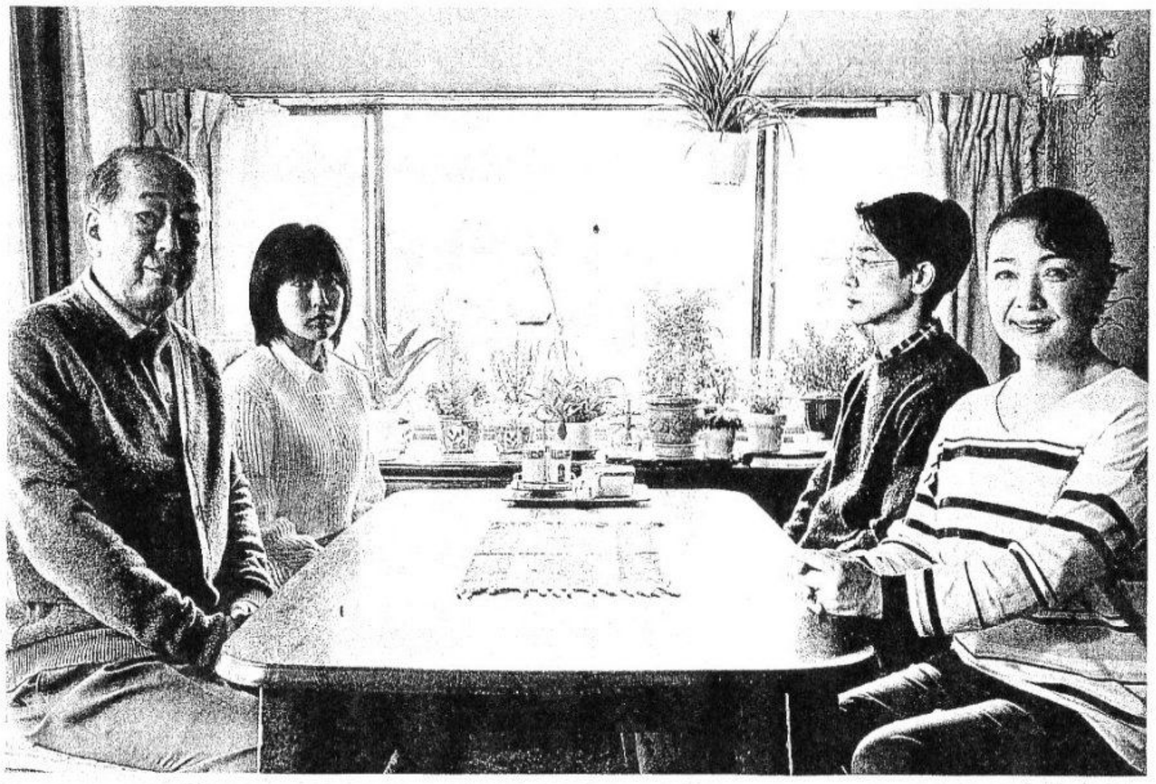
優等生過ぎる完璧作品

甘美な記憶が呼び戻される。「ボヘミアン・ラプソディ」の大ヒットの理由の一つをそう考える。1970年代半ばごろから80年代にかけて活躍した世界的なロックバンド、クイーンを描く作品だ。最終で、この時期としては画期的な興行収入である25億円以上が期待できる。

リードボーカルのフレディ・マーキュリーが主人公だ。随所で、有名な曲の数々が流れる。甘美な記憶は、彼の圧倒的な歌唱力、まろやかで力強い声質から引き起こされる。多くの日本の国民が、この記憶にのみ込ま

鈴木家の嘘

家族包み込む優しさ



主人公は「鈴木家」の父幸男（岸部一徳）である。しかし、母悠子（原日出子）の立場で見る人もいるだろうし、娘の富美（木竜麻生）に感情移入する人もいるはずだ。誰の立場で見ても心にしみる。それは、優れたホームドラマであるということだ。

引きこもりの長男浩一（加瀬亮）が、部屋で自ら命を絶った。発見した母はショックで気を失い、意識が戻ったのは四十九日の直後だった。ベッドを囲む家族に「浩一は？　まだ部屋？」と尋ねる母。記憶の欠落に気づいた娘は、とっさに「引きこもりをやめて、アルゼンチンでおじさんの事業を手伝っている」と出まかせを言ってしまう。

そこからはうそをうそで塗り固める喜劇。娘がアルゼンチンからの手紙を代筆し、革命家・ゲバラのTシャツを父が買い集める場面にはクスクス笑わされる。作り話がバレそうになる失敗や「あの日」を思い起こさせるような出来事も続き、「母がいつ気づくのか」とハラハラもする。

しかし、うそをつき続けるのは苦しい。やがて真実が明かされ、話は一転シリアス路線に。「あの日、私が買い物で留守にしなければ」と母は悔やみ、娘は兄にひどい言葉をぶつけたと自責する。それぞれが罪悪感を抱く姿に胸を締めつけられる。そして父は、浩一がなぜ死を選んだのか、心の謎に迫ろうとする。

笑いあり、涙あり、謎解きあり、と盛りだくさん。それでいて、全編に誰に対しても「許し」を与えるような、優しいまなざしがあった。今回が劇場映画デビュー作となる野尻克己監督は、兄を同じように亡くした経験があると鑑賞後に知り、納得した。

10～11月に開かれた第31回東京国際映画祭で、独創的な国内作品を選ぶ「日本映画スプラッシュ部門」の作品賞を受賞。木竜は飛躍が期待される若手俳優に贈られる東京ジェムストーン賞に輝いた。2時間13分。東京・新宿ピカデリー、大阪・シネ・リーブル梅田ほか全国で。（小）

◆ここに注目

しょっぱなから浩一の自殺場面で、映画は死の影が濃く漂う中で始まる。しかも身内の死を正面から捉え、残された家族の心情も丹念に追う。これで笑わせようというのだから、喜劇として成功させるのは相当難易度が高そう。オリジナル脚本でデビューの野尻監督、高いハードルに挑んで大健闘である。深刻さと滑稽さのさじ加減を巧みに調節し、映画の調子を決めてゆく。やり過ぎ気味の場面もあるものの、破綻なく着地も決めた。大森南朋や岸本加世子ら、脇を固めた俳優陣も特筆もの。派手さはないが、味のある一作。（勝）

◆技あり

芯になる女優が優れた技能の持ち主で、あて書きされたように柄にはまり、撮る方も力が入る。中尾正人撮影監督は、家族や親戚が集まる場面の人物サイズや後景の配色、光量の強弱を巧みにこなし、カメラを横に振るパンのタイミングもよく考えている。たとえば浩一納骨の夜、悠子が暗い部屋で彼の普段着を抱きしめて泣き崩れる。この状況では、カメラも彼女の動きにつけてパンするのが定法だが、中尾は動きからタイミングをずらして悠子に振る。母親の悲しみを増幅して効果的だ。日本の伝統的な家庭劇を、新しく止揚してみせた。（渡）